

北の鉄道風景

Train number; 2019M

2017.11.8 14:13

1/30, f/9, ISO 200, f=65mm, Daylight/Sunny

4912×7360 Raw

第116回

「白煙」

物心ついた頃から毎年聞かされた祖母の台詞がある。

「十一月はいやなのよね。ほんとうに寂しい…」

それは、単に木々が葉を落とし、風景に色彩が無くなり、雪がちらつきそうな鉛色の空が広がっているからだけではないことを、私は知っていた。苦楽を共にしてきた連れ合い、つまり、私の祖父が、逝ったのがこの月だったからである。祖父母の生き様は、並の恋愛小説や、一代記よりも面白く、その片割れが消えてしまった喪失感の投

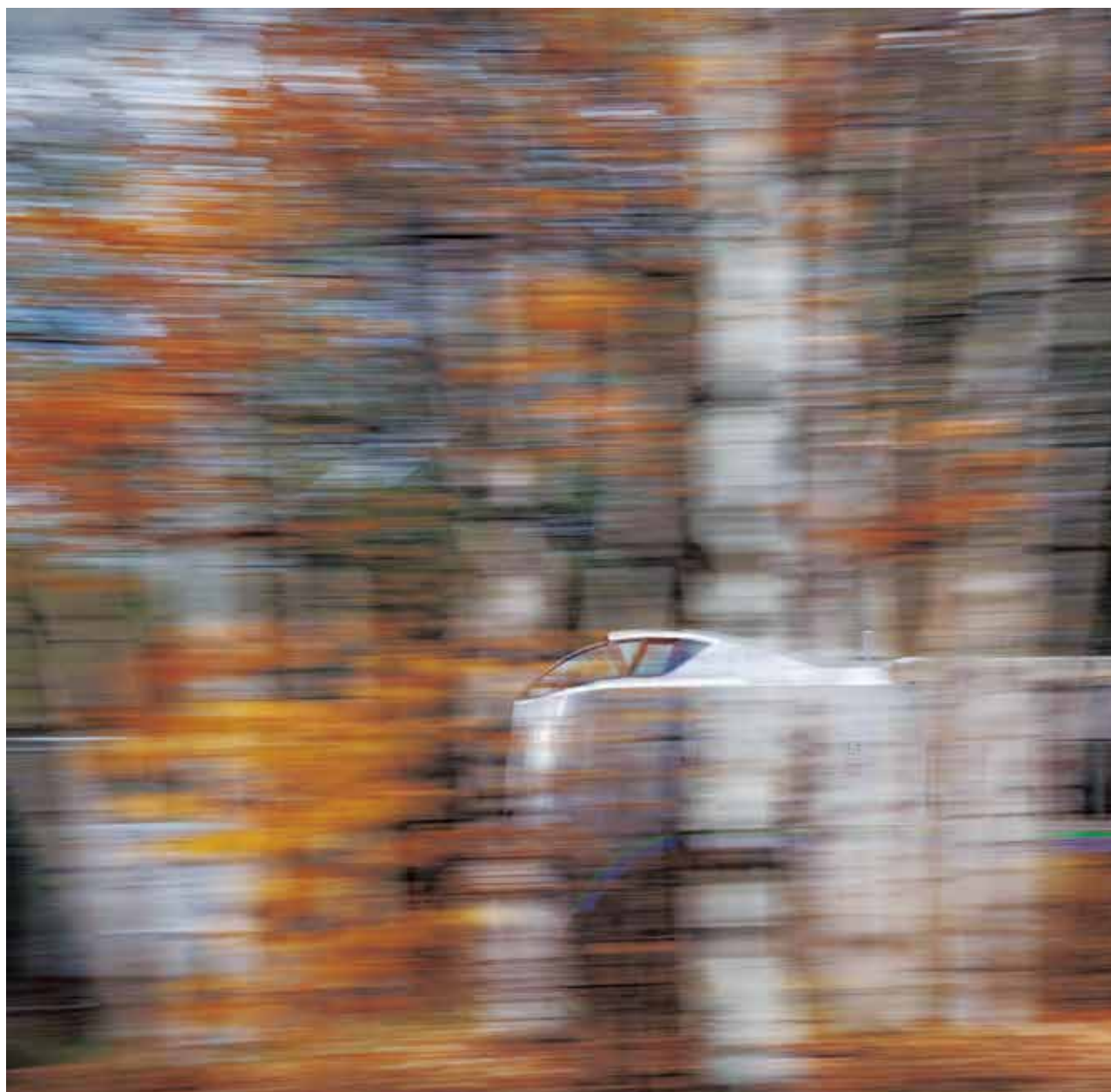
影のような十一月の佇まいは耐えられなかったのだろう。

巷でも、十一月という月の人気は低い。北海道では七五三も十月に逃げたし、景色も地味で、秋と冬の間、くらの捉え方しかされていないように見える。正月から師走まで並べてみても、十一月の陰の薄さが際立つが、私が一番好きな月は十二月である。

蒸気機関車が黒い煙をモクモク吐



客車6両を軽々と牽いて、無煙運転する貨物用マンモス機関車D52。真っ黒な機関車が、真っ白な排気を残して走り去る姿にこそ蒸気機関車らしさを感じる。函館本線 1972



写真と文＝眞船直樹

くのは、機関車状態が悪いか機関助士が下手な証拠である。復活SLの黒い煙は演出で、現役時代にあんなことをしたら、大目玉を食らった。あくまで、無煙運転が理想である。それが気温が下がってくると煙突から排出される蒸気が凝結して真つ白な湯気になり、いわゆる「白煙」を吐くようになる。正確には煙ではない、この「白煙」は十一月にもなれば普通に見られるようになる。枯野を泳ぎ、裸の林を抜けて、陽の光を時々温かいと感じながら、道のない野山を歩くワクワク感がたまらなかった。そして最後に、眼前に真つ赤な鉄橋が見渡せたり、羊腸ようちやうの道を見下ろせば大成功、汽笛が鳴ってもまだ林の中だったら大失敗であった。

全てが削ぎ落とされた十一月の山野の中でこそ真つ白な湯気の帯を残して走る汽車の存在がよく見えたし、無彩色の山野は人の存在の小ささをあぶり出すようだった。そういえば、十一月十九日は東海道本線全線電化が完成し、無煙運転超絶技法が要求された特急「つばめ」牽引からC62が降りた日でもある。そんなことを考えながら歩く枯れススキの海には誰もいない。❶